GUARD・PROJECT

寺水叶斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＵＡＲＤ・ＰＲＯＪＥＣＴ

【Ｎコード】
Ｎ１８２１Ｇ

【作者名】
寺水叶斗

【あらすじ】
不思議な雨によって不思議な能力を得た主人公、宰率いる護衛屋達が織り成すハチャメチャ能力コメディ。笑いあり、涙あり、ラブコメあり！？そんなお話

護衛屋始動編１（前書き）

本人気楽に書いているので、気楽に読んでください。

護衛屋始動編1

世界はとても平和だった。
だから、神様は退屈していたのかも知れない。

その水を浴びると不思議な能力を得られると言われる不思議な泉。
そんな泉が、この世界の何処かに存在していた。
そして、数多の冒険者達が、その能力を得るために泉を探しだそうとした。
だが、今だかつて、その泉を探し出した者は、誰1人としていなかった。
そしてそれは、神が、泉を守っていたためであった。
しかし、何を思ったのか、神は泉を虹色の雨と化し、世界中に降らせた。
そして、それから世界中に能力者が現れるようになった。

そして彼――――。
紫藤宰も、その雨によって能力を得た者の一人。

彼は、この平和惚けした世界で、護衛屋という商売をしていた。
護衛屋――――。
その名の通り、依頼人に頼まれた人や者を護衛する仕事である。
宰は、この仕事に人一倍誇りと拘りを持っていた。

しかし・・・。

「今日も依頼はナシ・・・か」

肝心の依頼が全くといっていいほど来ない。

それもそのハズ。
この世界は平和すぎるくらい平和である。
そんな中、護衛を必要とする人間なんているはずないのだ。

「・・・暇だな」

他にも仕事はあるだろうに。
それでも、ギリギリで生活できるくらいの食い扶持は稼げているというのだから不思議だ。

「今日の夕飯は何にすっかな～・・・」

頭の片隅でそんなことを考え始めると、宰は街に出た。
食料の買い出しだ。

「・・・カップラーメンでも作るとするか」

って、それでいいのか！

「そういや最近カップラーメンしか食ってねぇな・・・。
やっぱ、料理出来る仲間、見つけるべき、か？」

そんな事を呟きながら、街中を歩く。
すると、

ドンッッ！！

「あ、ゴメンなさい！」
「あ、悪い」

向こう側から走ってきた桜色の髪をした女とぶつかった。
女は軽く頭を下げると、再び走り出し、人並みの中へと姿を消した。

「今の女。料理出来るかな・・・」

違うだろ。

「・・・・・・あ」

ふとポケットに手を入れると、今までその中に入っていた物が無くなっている事に気づく。

「やべ。財布落としちまった;」

今月の食費が・・・。
と、肩をガックリ落とす。

＊＊＊

所変わって、人通りが少ない路地裏。
そこには先程宰がぶつかった桜色の髪をした女。
彼女の名前は、暁雨遥。
彼女もまた、宰と運命を同じくした能力者である。

遥の手には、ぶつかったときに盗ったであろう宰の財布。

「ひぃふぅみぃ・・・。って、たったの三千円しか入ってないじゃない。これじゃあ手術費の足しにもならないわ・・・」

そりゃそうだ。

殆ど仕事がない宰の生計は貧しい。

「まぁ、全くないよりはマシよね。」

そう言って、宰の財布を懐にしまう。

「さて、もう一狩りしてこようかしら」

そして、路地裏の奥へと向かって走って行った。
奥では、既に使われていない廃ビルの前に、ガラの悪い不良が屯している。
その前に、遥は仁王立ちで立ちふさがった。

「あ゛ー!?なんだテメェ!?」

勿論、不良も遥に気付きキツく睨み付ける。

ドゴッッ!

鈍い音が静かな路地裏に響く。

「テメェ。何しやがる・・・」

見ると、遥の蹴りがリーダーと思わしき不良の顔目掛けて飛んでいた。
いきなりそんなことをされて腹の立たないハズはない。
不良達もまた、遥に向かって拳を伸ばす。

ガシッ!

しかし、それはあっさりと受け止められた。
そこには、遥と同じ姿をした人物がもう一人。

「・・・お前、能力者か！？」
「そうよ」

不良は警戒して一旦身を引いた。

「あなたたちに恨みはないけれど、私にはお金が必要なの」

顔はあくまで笑顔でいるが、その声はどこか冷たい。

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！」

何がおきたか解らない一瞬のうちに、不良達はあっさりとその場に崩れ落ちる。
すると遥は、不良供の懐を漁り、財布を取り出した。

「ふぅ・・・」

額の汗をぬぐい、一息吐く。
そして財布の中身を確認しはじめる。

「・・・・・・まだ、全然たりないわ」

ふぅ、と軽くため息を吐き、その場から立ち去ろうと踵を返そうとする。

「お前、能力者だな？」

だが、足を踏み出そうとした瞬間、背後から声がかかった。

「丁度いいわ。あと一人くらい狩ろうと思っていたところよ」

遥は余裕の表情で振り返る。

その視線の先には、ガラの悪い男。

＊＊＊

一方その頃、宰は財布を探し歩いていた。

「あ〝ー！一体どこに落としてしまったんだ！？」

頭を抱え、今まであった事を思い返す。

そこでハッと気づいた。

「まさか、あの時・・・」

ぶつかった桜色の髪の女を思い出す。

「・・・まさか、な。・・・いやでも、可能性がない訳ではない」

問題は、あの女がどこにいるかって事だな。

そう考え、女・・・。

遥を探しに適当に歩き出した。

＊＊＊

パリーン！！

鏡の破片が、遥の周りに散らばる。

「鏡なんて、割っちまえば終わりだろ？」

「・・・なに、コイツ強い・・・」

「俺の楽しみはよぉ！能力者を殺すことだ！」

「・・・能力者狩りってやつかしら？ずいぶん物騒になったものね」

詰め寄ってくる男。

その手には刃渡り３０センチ程のナイフが握られている。

それに対して遥は警戒して一歩後ずさり構えの体制を取る。

「死ねぇぇぇぇ！！」

男は容赦なく斬りかかってきた。

ここまでか！

遥は覚悟を決めた、その瞬間。

「あぁ！！やっと見つけたぞ！」

角から人の姿が現れた。

自分の財布を盗ったと思わしき女を探し歩いていた宰だ。

「なんだテメェ！」

「あ、ビンボーな人」

「お前、俺の財布知らないか！？あの中には俺の大事な食費が！！」

宰は必死な様子。

だがどこか間抜けだった。

先程まであった緊張感もいつの間にかどこかへ吹っ飛んでおり、最初からいた2人はきょとんとした表情を浮かべて突っ立っている。

「ていうか、今
「ビンボーな人」って言ったな！？言ったよな！？何でそんなこと分かる！？やっぱり俺を財布を盗ったのか！？だったら頼む！返してくれ！」

宰は挙げ句頭まで下げだした。

「・・・な、何もそこまでしなくても・・・」
「返してくれるか！？」
「わ、分かった、返すよ。あれっぽっちの金なんてないのと変わらないし」

多少戸惑いながらも、女は懐から宰の財布を取り出し、本人に返した。

「これっぽっちとはなんだ！これは俺の大事な食費、生命維持費なんだぞ！」
「・・・ずいぶん安い命なのね；」
「・・・さ、３０００円は、安く、ない・・・」

遥のさりげない一言に宰は地面に崩れる。

え！？何コイツ、ヘタレ！？

そんな言葉が遥の脳裏を過る。
非常に困った様子でヘタレ、いや、宰を見る遥。

何か大切な事を忘れてやいないか。

「おい女テメェ！俺に狙われてること忘れてるだろ！」

能力者狩りの男だ。

「そういえば。アンタいたわね。すっかり忘れていたわ」

ようやく思い出した遥。

「忘れるなぁ！！」

男は額に青筋を浮かべて再びナイフを握る。

「なんだ？コイツ」

「能力者狩りよ」

宰と遥も警戒体制に入る。

男は二人に向かって容赦なくナイフを斬りつけてくる。

「・・・水よ！」

ナイフとの間合いが一気に詰められた瞬間。

宰が呟いた。

バシャァァァ！！

すると、男の足元から勢いよく水が吹き出し、その水圧によって吹き飛ばされる。

「うぉぉ！？」

そして、そのまま男は地面に叩きつけられた。

「・・・お前も能力者だったのか・・・」

水を操る能力。

それが、宰の能力だ。

その能力によって、男はそのまま気絶。

「あなたも能力者だったのね」

「別に珍しくないだろ？あの雨以来、寧ろ能力を持ってない奴の方が珍しいと思うぞ？」

「それもそうね」

言いながら、遥は男に近づいていく。

宰は頭に疑問符。

「何するんだ？」

宰の疑問も束の間、遥は男の懐をガサゴソと漁り始めた。

「財布を頂戴するのよ」

「・・・・・・；」

遥は財布を見つけると、それを取り出して早速中身を確認する。

「・・・まだ、足りないわ」

「・・・どうしてそんなに金が必要なんだ？」

金に執着する遥に、宰は新たな疑問を抱いた。

「病気のおばあちゃんの治療費よ」

「・・・そうか・・・」

「私は遥。暁雨遥。助けてくれてありがとう」

「紫堂宰だ。俺はただ財布を返してもらいたかっただけだぞ？」

名前だけの自己紹介。

その後、暫しの沈黙が流れる。

「・・・あと一週間・・・」

その沈黙を破ったのは、遥だった。

「あと一週間の間に手術をしないと、おばあちゃんは助からない・・・。

だから、それまでになんとしてでもお金が必要なの」

「そうか・・・。だったら、俺も協力しよう」

「・・・へ？」

思いもよらない宰の発言に、遥の目は点になる。

「まずいか？」

「そんなことない！」

「だったら、協力させてくれ」

「・・・でも、どうして？」

「お前の婆さん、大事な人なんだろう？」

「うん。身寄りのない私を引き取ってくれた、唯一の家族よ」

「俺は、護衛屋だ。だから、なんとしてでもお前の婆さんを病気から守る！」

拳を握り意気込む宰。
遥も表情を緩めて言う。

「・・・報酬なら期待しない方がいいわよ？」
「別に報酬はいらない。その代わりといっては何だが・・・」
「何？」
「お前、料理できるか？」
「え、まぁ、普通にできるわよ」
「なら、お前、料理要因として護衛屋に入らないか！？」
「は？」

再び目を点にする遥。
宰の表情は真剣そのものだ。

「カップラーメン生活はもうやめにしたいんだ！頼む！！」

宰は財布を返してもらうときと同様、いや、それよりも深く頭を下げだ。

「・・・・・・あなた、プライドないの？」
「ちゃんとした飯が食えるなら、プライドなんていくらでも捨ててやる」

宰は頭を下げたまま。
遥は戸惑いつつも考えた。

「・・・わかったわ。だから頭上げて」
「本当か！？」
「さすがに、毎日カップ麺じゃ体にも悪いでしょ？」

そりゃそうだ。

「それで、その治療費はいくらあればたりるんだ？」

「えーと、５００万位？」

「ご・ごひゃく万！？！？」

桁違いの金額に驚きを露にする宰。

だが遥は至って冷静に話を続ける。

「ここ二週間で、２００万集まったわ」

「一週間であと３００万・・・か」

二人はは考え始めた。

なんとかして一週間で３００万集める方法を。

「・・・既に２００万、あるんだったな？」

「ええ」

「それなら、いい方法がある！」ふと何かを思い付いた宰はの表情は真剣なものに変わった。

「えぇ。どうするつもりなの？」

遥も真剣に宰を見る。

しかし、その表情は一瞬にして変わる。

「博打だ！！競馬かスロット、なんなら麻雀でもいいぞ。一発あてて倍ｎ」

ゴンッッッ！！！

台詞が終わる前に、宰の脳天に衝撃が走った。

「なるわけないだろー！！！」

遥が怒りを露にして殴っていたのだ。

しかもグーで、思いっきり。

「いってぇぇ！！！」

宰は殴られた部分を抑えた。その目は涙目だ。

「博打なんてうまくいくわけないでしょ！苦労して貯めた私の２００万、全部棒に振るう気！？」

遥は怒る。

自分のばあさんの命がかかっている金に博打をしようなどと言い出すのたから、怒るのも無理ない。

「いい考えだと思ったんだが・・・」

自分の考えを却下されてその上殴られた宰は何処と無くしょんぼりする。

「真剣に考えるわよ！」

結局、いいアイディアは思い付かず、振り出しに戻る。

ヒラリ

手詰まりになっていた所に、一枚の紙切れが舞い落ちてきた。
それは宰の顔に触れ、視界を塞ぐ。
「うわっ！？何だ？コレは」
顔から紙を剥がし、その紙を見る。
「・・・これは」
どうやら、何かが書いてあるようだ。
「これ、手配書だわ」
「この人物を捕えた者に賞金１０００万を与える・・・」
そこにはいかにも悪事を働きそうな男の顔が写っていた。
そしてその下には、岩崎小五郎と書かれている。
この人物の名前だ。
「岩崎小五郎・・・こいつ、何処かで・・・」
「知っているのか？」
「ううん。ただ、何処かで見たことがあるってだけ」
「こいつを捕まえて警察に突き出せば金がもらえるんだよな」
「え、えぇ・・・。ってまさか、賞金首を狙うの！？」
「その法が不良狩りなんかよりもずっと手っ取り早い」
「で・でも、危険過ぎだわ！」
遥かは宰のその発案に困惑の表情を浮かべた。
しかし、宰は至って真剣である。

「これ以外に確実な方法があるというのか？」
「で、でも・・・」
「ばあさんを助けたいんだろう？」
「もちろんよ！」
「だったら決まりだな」
「・・・え、えぇ」

これしか大金を手に入れる方法はない。
まだ不安を抱きながらも、遥は宰の提案に賛成した。

「遥も俺も能力者！きっと大丈夫だ！」
「・・・そうよね！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1821g/

GUARD・PROJECT

2010年10月12日01時27分発行